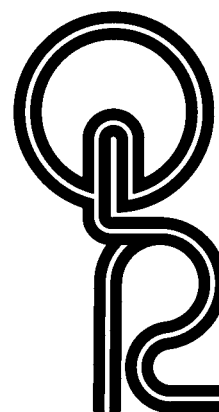


QR Newsletter

第四紀通信

Vol. 24 No.6, 2017



2017年福岡大会の巡検「熊本地震関連で巡る熊本～阿蘇」で訪れた益城町の木山低地に出現した地表地震断層。舗装道路の白線をみると、断層運動によって1m弱の右横ずれが生じたことが分かる。(撮影者：吾妻 崇)

Vol. 24 No. 6

December 1, 2017

2018年大会案内(第2報).....	2	自然史学会連合報告.....	11
地球惑星科学連合大会案内(第1報)	2	シンポジウム案内.....	12
.....	2	執行部会議事録.....	14
2018年学会賞等推薦募集.....	3	紙碑.....	15
2017年大会若手・学生発表賞報告...	5	第2回評議員会案内.....	16
2017年大会巡検報告.....	5	会員消息.....	16
第3回ASQUA報告.....	7		

◆日本第四紀学会 2018年大会案内 (第2報)

2018年大会は以下の概要にて開催します。

日程：2018年8月24日(金)～26日(日)

一般発表・総会・公開シンポジウム(シンポジウムテーマは検討中)

8月27日(月)～28日(火) 巡検

1泊2日での伊豆諸島方面の巡検、または1日の都内周辺域の巡検を予定。

会場：首都大学東京南大沢キャンパス 講堂・7号館スタジオ

大会実行委員長：鈴木毅彦(首都大)

実行委員：行事委員会(委員長 藤原 治(産総研))で担当

◆日本地球惑星科学連合 2018年大会のお知らせ (第1報)

2018年5月20日(日)～5月24日(木)に日本地球惑星科学連合2018年大会が千葉県千葉市の幕張メッセで開催されます。第四紀学会では、これまでと同様に、「第四紀：ヒト-環境系の時系列ダイナミクス」(セッション名を変更しました)を単独で、「活断層と古地震」を他学会と共同で主催予定です。ほかにも第四紀関連セッションが多数提案されています。会員の皆様の積極的な参加を期待しています。

大会に関する詳細は http://www.jpгу.org/meeting_2018/ をご覧ください。

【今後の主な日程】

- 12月 1日(金) 開催セッション・コマ割り公開
- 1月 10日(水) 投稿・参加登録開始
- 2月 5日(月) 投稿早期締切(23:59)
- 2月 19日(月) 投稿最終締切(17:00)
- 3月 13日(火) 採択通知
- 3月 14日(水) 発表プログラム一般公開
- 5月 8日(火) 早期参加登録締切(23:59)
- 5月 11日(金) 予稿PDF公開

【投稿料】

▶早期投稿：

2018年1月10日(水)～2月 5日(月) 23:59 決済分 投稿料 ¥3,240/1件

▶通常投稿：

2018年2月 6日(火)～2月 19日(月) 17:00 決済分 投稿料 ¥4,320/1件

【早期参加登録料】(2018年1月10日(水)～5月8日(火) 23:59 決済分)

▶会員割引料金 (AGU, AOGS, EGU 会員を含む)

- | | | |
|------------|-----------------|-------------|
| 一般 | 全日程券：¥22,680 | 一日券：¥14,040 |
| 小中高教員 | 全日程券：¥11,880 | 一日券： ¥7,560 |
| 大学院生 | 全日程券：¥11,880 | 一日券： ¥7,560 |
| シニア(70歳以上) | 無料 (JpGU 正会員のみ) | |

▶通常料金 (割引無し)

- | | | |
|-------|--------------|-------------|
| 一般 | 全日程券：¥32,400 | 一日券：¥22,680 |
| 小中高教員 | 全日程券：¥19,440 | 一日券：¥14,040 |
| 大学院生 | 全日程券：¥19,440 | 一日券：¥14,040 |

【通常参加登録料】(2018年5月9日(水)～5月24日(木)決済分)

▶会員割引料金

一般	全日程券：¥30,240	一日券：¥19,440
小中高教員	全日程券：¥16,200	一日券：¥10,800
大学院生	全日程券：¥16,200	一日券：¥10,800
シニア(70歳以上)	無料(JpGU正会員のみ)	

▶通常料金(割引無し)

一般	全日程券：¥43,200	一日券：¥27,000
小中高教員	全日程券：¥25,920	一日券：¥19,440
大学院生	全日程券：¥25,920	一日券：¥19,440
ファミリーパス	全日程券：¥2,160	一日券：¥1,080

※上記の料金は、すべて税込の金額です。

※「学部生以下」は、参加費が無料です。

※ファミリーパスは、会場での発行のみとなります。

◆2018年「日本第四紀学会学会賞」等の推薦のお願い

「日本第四紀学会会則」の第3条(3)に基づき、2018年に表彰を行う日本第四紀学会の各種顕彰の受賞候補者の推薦募集を行います。各賞ともに、それぞれの選考委員会で受賞候補者が選考された後に、2018年6月に開催される評議員会で受賞者が決定され、2018年大会で表彰される予定です。会員のみならず、さまざまな方からの多数のご応募をお待ちしております。

1. 各賞の概要と推薦書類の記入内容

■「学会賞」・「学術賞」

「日本第四紀学会学会賞」(以下「学会賞」と「日本第四紀学会学術賞」(以下「学術賞」)は、第四紀学の発展に寄与する研究や学会活動への貢献を行ってきた会員に贈られる賞です。これらの賞の受賞者の選考は、会員から推薦された候補者の中から学会賞受賞者選考委員会が受賞候補者を選考します。その後、委員会における選考結果に基づき、2018年6月に開催予定の評議員会で受賞者が決定され、2018年大会で表彰される予定です。

「学会賞」：第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動及び学会活動に貢献した正会員に授与。学会における最高の賞。毎年若干名。

「学術賞」：第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与。優れた編書、著書、論文などの一連の業績が対象。対象成果が複数の著者(研究グループ等を含む)によりなされた場合は、筆頭著者または代表者に授与。毎年若干名。

推薦にあたっては、学会HPの「会則・規程」のページ(<http://quaternary.jp/intro/rules/rules.html>)に掲載されている「日本第四紀学会顕彰規程」及び「日本第四紀学会学会賞・学術賞選考に関する内規」をご参照の上、下記の情報を記した推薦書類を作成して下さい。なお、過去に受賞した会員は同じ賞を受賞することはできませんので、学会HPの「歴史」のページ(<http://quaternary.jp/intro/gakkaisyo.html>)で歴代受賞者を事前にご確認頂きますようお願い致します。

- (1) 推薦者の氏名・所属・連絡先(自薦を含む)
- (2) 賞の名称
- (3) 候補者の氏名・所属・連絡先
- (4) 「学会賞」の場合には、具体的な業績や活動内容を示した受賞件名
「学術賞」の場合には、受賞の対象となる一連の業績を含めた受賞件名
- (5) 推薦理由(1000字以内)

■「若手学術賞」

今年度から日本第四紀学会の顕彰制度に「日本第四紀学会若手学術賞」(以下「若手学術賞」)が新たに加わります。この賞は第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた若手会員(2018年4月1日時点で39

2018年学会賞等推薦募集

歳以下の会員)に授与されるもので、優れた編書、著書、論文などの一連の業績が対象となります。対象成果が複数の著者(研究グループ等を含む)によりなされた場合は、筆頭著者または代表者に授与することとなります。受賞者数は若干名です。この賞の候補者選考は、学会賞受賞者選考委員会が行います。

推薦にあたっては、学会HPの「会則・規程」のページ(<http://quaternary.jp/intro/rules/rules.html>)に掲載されている「日本第四紀学会顕彰規程」及び「日本第四紀学会若手学術賞選考に関する内規」をご参照の上、下記の情報を記した推薦書類を作成して下さい。

- (1) 推薦者の氏名・所属・連絡先(自薦を含む)
- (2) 賞の名称
- (3) 候補者の氏名・所属・連絡先
- (4) 候補者の業績に関する情報
- (5) 推薦理由(800字以内)

■「論文賞」・「奨励賞」

2018年の「日本第四紀学会論文賞」(以下「論文賞」と「日本第四紀学会奨励賞」(以下「奨励賞」)は、過去2年間に刊行された「第四紀研究」(第55巻第1号～第56巻第6号)に掲載された論文と著者が対象となります。会員からご推薦頂いた候補論文/候補者の自薦・他薦を踏まえ、論文賞受賞者選考委員会において受賞候補論文・受賞候補者の選考を行います。受賞論文と受賞者は、2018年6月に開催予定の評議員会において受賞者が決定され、2018年大会で表彰される予定です。

「論文賞」:会員である論文著者全員に授与。毎年1～2件程度。対象は掲載された全ての論文(短報を含む)。

「奨励賞」:会員である筆頭著者に授与。年齢は2018年4月1日時点で35歳以下。毎年1～2件程度。受賞者には副賞として5万円の奨学金が授与されます。

推薦にあたっては、学会HPの「会則・規程」のページ(<http://quaternary.jp/intro/rules/rules.html>)に掲載されている「日本第四紀学会顕彰規程」及び「日本第四紀学会論文賞・奨励賞選考に関する内規」をご参照の上、「論文賞」については候補論文を、「奨励賞」については候補者をご推薦頂きますよう、お願い申し上げます。推薦書類には、下記の情報を記入して下さい。

- (1) 推薦者名(自薦を含む)
- (2) 賞の名称
- (3) 「論文賞」の場合には、全著者名と候補論文名(巻号頁を明記)
- (4) 「奨励賞」の場合には、候補者名と推薦論文名(巻号頁を明記)
- (5) 推薦理由(1000字以内)

なお、「奨励賞」については過去に受賞した会員は受賞することはできませんので、学会HPの「歴史」のページ(<http://quaternary.jp/intro/gakkaisyō.html>)で歴代受賞者を事前にご確認頂きますようお願い致します。

2. 推薦書類の送付先

各賞の推薦書類は、郵送または電子メールで送付して下さい。送付先の住所ならびに送信先のメールアドレスは下記のとおりです。

郵送:〒169-0072 東京都新宿区大久保2丁目4番地12号 新宿ラムダックスビル10階

電子メール: [daiyonki\(at\)shunkosha.com](mailto:daiyonki(at)shunkosha.com) (“(at)”の部分を変えて下さい)

郵送の場合の宛名は、「日本第四紀学会 学会賞候補者選考委員会宛」(「学会賞」「学術賞」「若手学術賞」の場合)、もしくは「論文賞候補者選考委員会宛」(「論文賞」「奨励賞」の場合)として下さい。電子メールの場合には、それぞれの宛先を電子メールの件名に入力して送信して下さい。

3. 提出期限

推薦書類の提出期限は、いずれも2018年1月31日(水)【必着】です。

◆2017年大会 若手・学生発表賞受賞者について

2017年8月に福岡大学で開催された2017年大会における若手・学生発表賞（選考委員：池原 研・藤原 治・里口保文・百原 新・小森次郎）の受賞者は以下の方々と決まりました。

受賞者のみなさま、おめでとうございます。

【口頭若手部門】

- ◎箱崎真隆 会員 演題：「西暦775年炭素14スパイクに基づく白頭山10世紀噴火の年代検証」
発表者：箱崎真隆・三宅美沙・中村俊夫・木村勝彦・増田公明・奥野 充

【口頭学生部門】

- ◎畑中美沙希 会員 演題：「骨コラーゲンの同位体分析によるマダガスカル絶滅種の食性解析」
発表者：畑中美沙希・横山祐典・小川奈々子・宮入陽介・Geoffrey Clark・大河内直彦

【ポスター若手部門】

- ◎杉中佑輔 会員 演題：「ボーリング資料を活用した東京台地部の東京礫層の空間展開」
発表者：杉中佑輔・遠藤邦彦・石綿しげ子・堀田文雄・須貝俊彦・堀 伸三郎

【ポスター学生部門】

- ◎泉田温人 会員 演題：「茨城県常総市鬼怒川のクレバススプレーを形成した洪水の古水理復元」
発表者：泉田温人・須貝俊彦・松崎浩之

◆巡検1「古代伊都国の史跡と第四紀地質」報告

佐藤善輝（産業技術総合研究所）

日本第四紀学会2017年福岡大会の巡検1は、「古代伊都国の史跡と第四紀地質」をテーマとして8月29日に実施された。小池裕子氏（九州大）、下山正一氏（佐賀大）、磯 望氏（西南学院大）に加え、福岡市から榎本義嗣氏と阿部泰之氏、糸島市から河合 修氏と秋田雄也氏（伊都国歴史博物館の岡部裕俊氏が急用のため代理参加）にご案内頂き、案内者を含む計20名が参加した。

九大学研都市駅に集合後、最初の目的地である今宿大塚古墳を目指した。この古墳は高祖山北側に点在する今宿古墳群のひとつで、高位段丘の地形を利用して古墳時代後期に造営された前方後円墳である。管理状態が良好で、車窓から雄大な姿を見ることができた。

その後、福岡市今津地区に向かった。ここでは東西約3kmにわたって元寇防塁が築かれている。この防塁は、西暦1274年の文永の役による被害を受けて急ピッチで作られた。防塁の一部は砂丘砂が除去され、築造当時を復元した状態を観察することができる。今回、特別に保護フェンス内に立ち入り間近で壁面を観察することができ、防塁の築造方向が直線状でなく所々に凸凹があること、防塁を構成する礫種（玄武岩、花崗岩類、緑色片岩）の割合が急変する箇所があることが確認できた。これらは、分担して同時並行で建設作業を進めていたことを示すものである。元寇防塁の壁面からは、迫りくる蒙古軍に備え大急ぎで建設作業を進める人々の息遣いまでもが感じられた。

元寇防塁を後にした一行は、糸島半島東部を周回した後、元岡瓜尾貝塚に到着した。この貝塚は縄文時代後期のもので、九州大学伊都キャンパス

南側の溜池沿いに貝層を見出すことができる。真新しいキャンパスと貝塚遺跡という数千年のコントラストが印象的であった。施設建築に際して考古発掘調査が実施されており、今津湾周辺の自然環境変遷について多くの知見が得られているとのことである。

その後、今津湾と船越湾を結ぶ「糸島水道」中央部に立地する志登支石墓群に到着した。この遺跡は弥生時代早期～中期のもので、沖積低地面から僅かに顔を覗かせるAso-4火砕流堆積物から成る微高地上に位置する。支石墓は古代朝鮮半島に特徴的な墓制で、日本では九州北部で報告されている。ここでは支石墓の天井石である径数10cm～1m程度の礫が地表面に点在する様子が観察できた。また、志登支石墓群の存在や周辺の調査結果から、「糸島水道」は中央部で海域が断絶していた可能性が高いことが紹介された。

伊都国を南に進み、伊都国歴史博物館にて昼食後、館内施設を見学した。博物館には伊都国の古墳群から出土した銅鏡や甕など、貴重な資料が展示されている。直径数10cmもある大型銅鏡や精緻なデザインを直に観察し、当時の高度な銅鏡製作技術を実感できた。その後、伊都国王墓のひとつである平原遺跡に向かった。遺跡は中位段丘面上に立地しており、眼下には沖積低地と低位段丘面が、さらに東方に目を転じると日向峠を眺望することができる。日向峠と遺跡との位置関係から、遺跡が太陽信仰と関連していると解釈する学説もあるとのことである。

その後、沖積低地を横断し、高祖山西麓の怡土城址に向かった。怡土城は吉備真備によって奈良

時代に造られた山城で、山頂から山麓にかけて「たすき状」に土塁が設置されている。この土塁の建設様式は中国文化の影響を強く受けたものである。土塁の一部は現存し、頂部の幅約1.5 m、高さ3 m程度の土塁頂上からかつての城内を望むことができた。

怡土城の土塁を眺めながら北上し、最後の目的地である高祖山北麓の丸隈山古墳に向かった。この古墳は古墳時代中期に築造された前方後円墳で、当時、朝鮮半島から伝播したばかりの横穴式石室が設置されている。現地では復元された石室内部を特別に観察する機会を得た。こうして、大きな

トラブルもなく無事に巡検を終えることができた。

福岡は古くから人々や文化の交流の場であった。今回の巡検では、当時の文化交流の最先端施設であった古墳や遺物、遺構などに触れることができた。また、侵略的交流からの防御という点からも、防塁築造時の様子を感じることができた。自然環境と人間活動との交流という点からも多くの学びがあり、第四紀学的にも非常に充実した巡検であった。このよき機会を与えてくださった案内者および関係者の皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

◆巡検2「熊本地震関連で巡る熊本～阿蘇」報告

西澤文勝（首都大学東京都市環境学部）

日本第四紀学会2017年大会の2件の巡検のうち「熊本地震関連で巡る熊本～阿蘇」は8月29日から30日に実施された。案内者は鳥井真之氏（熊本大学くまもと水循環・減災研究教育センター）、遠田晋次氏（東北大学災害科学国際研究所）、奥野充氏（福岡大学理学部）の3名であり、当日は総勢21名の参加者を案内していただいた。

JR肥後大津駅に集合して最初に向かったのは、阿蘇大橋付近の大崩壊露頭である（写真）。熊本地震を象徴するようなこの大規模崩壊は2つの崩壊源から発生し、本来なら存在するはずの火山灰など堆積物が欠如していることから、この場所では崩壊を繰り返してきたことが説明された。現場ではAT火山灰より上に累重した過去の崩積土も確認できた。

Stop 2～4の南阿蘇村立野周辺では、テクトニックバルジ地形とその横断面露頭、鏡肌を観察した。31 kmにおよぶ布田川断層系で地表に露出した断層面は5地点のみであり、立野ダム建設現場はそのうちの1つ（右横ずれ1.3～1.5 m）とのことだった。ここでの断層面は、過去の動きで露出した部分と今回の地震で動いた部分とが地衣類の付着具合のコントラストにより、明瞭に分かれて観察できた。高野尾羽根火山の表層崩壊の現場では、アースフロー堆積物の産状を観察した。地形区分と野外観察に基づいてマルチプルな崩壊が起きていたことが解説された。この崩壊のすべり面に関して、この地域では物性的な境界面となった阿蘇草千里ヶ浜火山降下軽石が結果的に注目されることだった。崩壊のメカニズムに関しては、特に地下水の関与の有無について参加者同士で活発な議論がなされていた。

2日目は、まず小森牧野の出ノ口断層の正断層地形を遠望したのち、それに平行して表れた右横ずれ断層露頭を西原村萌の里で観察した。益城町堂園においては多くの報道で目にした麦畑に現れた地表断層を見学した。この地点は後世に災害



阿蘇大橋付近の大崩壊露頭で説明を受けている様子

を伝える地域資源として保存計画があるとのことだった。益城町中心部では地震断層西端における被害を目の当たりにした。特に木山神社では本殿が現在でも倒壊したままの状態であり、今回の地震の被害が最も視覚的に認識される場所だった。また、日奈久断層の北端付近とされる御船町高木においては余効すべりの現場を観察した。未だ余効すべりの細かいメカニズムは不明とのことだったが、復興と被害をもたらしうる現象とが現在も進行形で被災地に共存している事実が印象的だった。

今回の巡検では、当然ながら複数の見解がある観察地点も多く、熊本地震の災害としてまた自然現象としての存在の大きさを実感した。いくつかのstopでは施工現場の担当者による行政の立場からの解説があった。また参加者である徳島大学の西山賢一氏、防災科学技術研究所の木村克己氏にも解説をいただく場面があった。案内者の皆様には、できる限り多くの案内地点の訪問を計画していただき、なお且つ終始丁寧な解説をしていただいた。この場を借りて、3人の案内者および関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

◆第3回アジア第四紀学会会議 (3rd ASQUA Conference) 報告

齋藤 文紀

2017年9月4日から7日まで韓国済州島のロッテ・シティー・ホテル・チェジュにおいて第3回アジア第四紀学会会議が開催された。同会議は、日本第四紀学会の50周年記念事業として2007年につくばで開催された国際集会において、参加したアジア各国の研究者との会合で、4年ごとにINQUAのinter-congressの会合として開催すること、名称をAsian Conference on Quaternary Research (ASQUA) とすることが合意された。第1回会合は、2009年10月19～23日に中国北京において、中国第四紀科学研究会 (Chinese Association for Quaternary Research: CHIQUA) と中国科学院古脊椎動物与古人類研究所の共催で、北京原人第1頭蓋骨発見80周年の記念集会と合わせて開催された (第四紀通信17巻1号10-11ページ参照)。第2回会合は、2013年9月8～15日にロシアのUlan-Udeにおいて、ロシア科学アカデミーのシベリア支部地質研究所 (Geological Institute) がホストとなり実施された (第四紀通信20巻6号9ページ参照)。第1回と第2回は、日本代表として熊井久雄元会長がビジネス会合に参加している。第1回と第2回会合では、Asian Conference on Quaternary ResearchをASQUAとしていたが、第2回ビジネス会合において、Asian Association for Quaternary Research (アジア第四紀学会) とすることが決定され、次回会合の開催地から president を選出することになり、韓国地質資源研究院 (KIGAM) の Ju-Yong KIM 氏が選ばれている。この名称については、今回の第3回会議において再確認され、日本へはこの報告が最初となる。ASQUAの日本語名は、アジア第四紀研究会議をこれまで用いていたが、名称変更に伴い、アジア第四紀学会とする。

第3回会議 (3rd ASQUA Conference) は、韓国第四紀学会 (KOQUA) と韓国地質資源研究院 (KIGAM) がホストとなり、韓国旧石器学会、韓国地理学会、世界遺産済州事務局が共催し行われた。第2回会議では、KIM氏が president に仮選出されたが、大会実行委員長 (president) は、同じく KIGAM の Dong Yoon YANG 氏が執り行った。Ju-Yong KIM と Sangheon YI 氏が事務局のとりまとめを行っている。

日程は、9月4日に登録とアイスブレイカー、5日に登録、開会式、基調講演、一般研究発表、コンファレンス・バンケット、6日に基調講演と一般研究発表、7日が済州島の巡検となっている。大会参加者は、韓国、中国、日本、台湾、タイ、

マレーシア、モンゴル、ロシア、米国、ドイツ、フランス、チェコ、ポーランドの13ヶ国・地域から約200名が参加し、日本からの参加者は約20名であった。大会は、主テーマが「Quaternary Environmental Changes and Human Response」で、6件のプレナリーの基調講演が行われ、一般研究発表はプレナリー会場を3会場に分けて口頭発表が実施された。主たるセッションのテーマは、Earth Environment、Natural Geohazards、Human Adaptation で、基調講演を除いて86件の口頭発表、72件のポスター発表があった。合わせて164件の研究発表が行われた。基調講演では、各国からの代表ということで、日本からは齋藤が最終氷期以降の東シナ海の高環境について講演した。口頭発表会場前のホワイエで、ポスター展示やコーヒーの提供が行われ、非常にコンパクトに準備されていた。

9月5日の夕方に ASQUA のビジネス会合が実施された。ビジネス会合には、中国から Jule XIAO、Fa-Hu CHEN、Weijian ZHOU、日本からは齋藤と鈴木毅彦、台湾からは Min-Te CHEN (INQUA 執行部からの代表を兼ねる)、ロシアからは F. Khenzykhenova、韓国からは Dong Yoon YANG、Ju-Yong KIM、Sangheon YI が参加した。会議では次回会合が議論され、2021年9月から10月に中国で開催すること、当面の president として Jule XIAO 氏が選出された。また、ASQUA の名称 (Asian Association for Quaternary Research) の再確認が行われた。第2回会合は、Quaternary International から特集号として出版されていることから、今回についても QI から特集号として出版することになり、責任ゲストエディターとして KIGAM の Sangheon YI 氏が選出された。手続きとしては、9月末までに投稿希望者は著者とタイトルを YI 氏に送付し、取りまとめで QI の編集長である Min-Te CHEN 氏に提案する。原稿の投稿締切は2018年3月末と決まった。

日本第四紀学会の50周年の記念事業で行った国際集会から早10年が経過し、その間に日本では INQUA 大会を開催し、ASQUA も第3回となり、アジアの第四紀研究とそのネットワークは着実に広がってきていることを実感した。各国の研究レベルも向上している。第四紀研究においては、Regional な地域の研究が重要であることから更に発展することを期待し、今後の会議への日本からの積極的な参加をお願いしたい。

◆第3回アジア第四紀学会会議 (3rd ASQUA Conference) 参加報告

●姜 怡辰 (九州大学理学府)

The Asian Association for Quaternary Research (ASQUA) は2007年日本第四紀学会の創立50周年記念シンポジウムで提案され、アジアからの第四紀学者の科学者間の科学的なコミュニケーションと協力のための重要な基盤としての役割を果たすことを目的とする。第1回の学会は2009年中国の北京で開催され、第2回は2013年ロシアのウラン・ウデ (Ulan-Ude, У л а н - У д э) で開催された。本稿では2017年9月4～8日の間、韓国の済州 (チェジュ) で開催された The 3rd Asian Association for Quaternary Research Conference について報告する。

本学会には、13か国 (韓国、中国、日本、ロシア、台湾、アメリカ、タイ、マレーシア、モンゴル、チェコ、ポーランド、ドイツ、フランス) からの約200名が参加し、9月5日から6日までの2日間で、口頭発表が92件、ポスター発表が72件であった。9月7日は Field Excursion として、済州島一帯を回る日程であった。

1日目 (9月5日) は、朝9時から開催式があり、午前中は Keynote Speech があった。Min-Te Chen 教授 (National Taiwan Ocean University, Taiwan) の「熱帯太平洋における後期第四紀の水文学的变化と台湾での第四紀研究紹介」、Kyung Sik Woo 教授 (Kangwon National University, Korea) の「済州の地質遺産の価値及びその古気候学的含意」、齋藤文紀教授 (島根大学エスチュアリー研究センター) の「最終氷期最盛期以降の東シナ海の堆積環境と海岸の進化」、Jule Xiao 教授 (Chinese Academy of Sciences, China) の「東アジアの夏季モンスーンマージンの Lake Daihai における 4.2 ka イベントとそれに伴う社会崩壊」のタイトルで講演があった。

その後、3つのセッションルームに分かれ、口頭発表があった。セッションルーム1では考古学と人間生態系というトピックで、アジアおよび周辺諸国の旧石器時代・年代層序学、東ユーラシアにおける旧石器時代と年代および環境、東アジアの現代人類学とバイオアーキオロジーの3つのサブセッションで口頭発表が行われた。セッションルーム2では第四紀の火山活動、年代学、気候モデリング、セッションルーム3では沿岸および海洋のプロセス・海面の変化・沿岸災害、ジオハザードのセッションがそれぞれ行われた。第四紀の火山活動のセッションでは主に済州島においての研究を聞くことができた。沿岸および海洋のプロセス・海面の変化・沿岸災害のセッションでは、多様な手法を使っての古環境復元に関する研究を聞くことができた。

口頭発表のセッションが終わり、全セッショントピックのポスター発表のコアタイムが1時間くらい行われた。

2日目 (9月6日) は、朝8時から Keynote Speech が行われた。Fa-Hu Chen 教授 (Lanzhou University, China) の「完新世におけるアジア夏季モンスーンと塵嵐の歴史」、Jonathan Woodruff 教授 (University of Massachusetts Amherst, USA) の「背後ラグーンと背後湖の堆積物からみた洪水リスクの変化」のタイトルでの講演があった。

その後、前日と同様3つのセッションルームに分かれ、セッションルーム1では、更新世と完新世の地質学と考古学的手法のトピックでセッションがあった。セッションルーム2では東ユーラシアのパレオバイオーム、セッションルーム3では古気候変動のセッションが行われた。東ユーラシアのパレオバイオームセッションでは、前半では昔の植生復元のために花粉化石を使った研究を聞くことができ、後半では動物相からの研究を聞くことができた。

3日目 (9月7日) は、Field Excursion の日で、朝8時にホテルを出発し、済州島一帯を回る予定であった。この巡検は Gyeongsan National University の Young Kwan Sohn 教授が案内し、Hyeopjaegul Lava Tube (in the Hallim Park) → Suweolbong Tuff Ring → Sanbongsan Lava Dome と Yongmeori Tuff Ring → Jungmun-Daepo Columnar-Jointed Lava → Seogwipo Formation の順の行程であった。Hyeopjaegul Lava Tube は周辺が貝砂層であるため、溶岩洞窟ながらも石灰洞窟のような地形が形成されている洞窟であった。内部には鍾乳石や石筍が発達していて、溶岩が流れた跡と同時に見る事ができた。Suweolbong Tuff Ring では約1万8千年前に海底で起こった



Seogwipo Formation の露頭。
波食台に落ちている Seogwipo Formation 岩体から貝類化石を見ている。

火山噴出により形成された火山碎屑物の堆積相を観察することができた。明暗のはっきりした堆積相は重ね重ね堆積していて、所々火山から飛んできたと思う石もよく残っていた。火砕乱流 (pyroclastic surge) が噴出地から遠くなるに伴って堆積した碎屑物が細くなるのを見ることができた。Sanbongsan Lava Dome は、高さ 395m の粗面岩質安山岩で構成された典型的な溶岩ドームであり、Yongmeori Tuff Ring は更新世初期に形成された火山が浸食されて、Yongmeori (韓国語で龍頭) の形になっている。Sanbongsan Lava Dome のよく見えるところで昼食をとり、左は砂岩層の浜崖、右はすぐ海という道海岸散策路で Yongmeori Tuff Ring を一周した。Jungmun-

Daepo Columnar-Jointed Lava は海岸に沿って柱状節理が分布しており、溶岩による地形の形成と海蝕作用による海岸地形の発達を観察することができた。Seogwipo Formation は済州島の火山層序において、最も下位の地層であり広く分布しているが、地上に露頭として観察できる場所は Seogwipo 海岸だけであった。この層には貝類化石が多く含まれており、済州島の形成時期の古環境復元にも重要な意味を持っている。波食台でも露頭から落ちてきた岩体がごろごろあったので、そこからすぐにホタテ貝などの貝化石を観察することができた。

最後になりますが、学会・巡検の企画運営をいただいた組織委員会の方々に御礼申し上げます。

●西内李佳 (千葉大学大学院)

2017年9月4日(月)～8日(金)に韓国の済州島のロッテシティホテル済州で開催された「The 3rd Asian Association for Quaternary Research (ASQUA2017)」に参加してきました。この会議は、日本第四紀学会 50 周年記念の国際シンポジウムを機に始まった 4 年に 1 度の研究会議で、第 1 回目の中国(北京)、第 2 回目のロシア(ウラン・ウデ)に続き、今回が 3 回目の開催になります。今回は 13 ケ国から約 200 名が参加し、日本からも約 20 名が参加しました。研究会議の日程は、基調講演、研究発表、巡検で構成されていました。9月5日(火)と6日(水)の1日半の間に、基調講演6件と、9つのセッションに分かれた口頭発表86件、ポスター発表72件がおこなわれる密度の濃いものでした。

1日目の9月5日(火)の午前は、オープニングセレモニー、合同写真撮影の後、4件の基調講演がおこなわれました。基調講演では、4名の研究者が、東アジアにおける第四紀研究について、自身の研究を中心として特に最近注目されていることや明らかになったことなどを話されました。江原道大学の Woo 氏は、開催地である済州島の世

界自然遺産である溶岩洞窟と、そこから明らかになった古気候変動について話されました。

基調講演の後、会場で待っているようにとの案内に従い待っていると、スタッフによって昼食の牛肉スープとご飯に小鉢がついた韓国料理が1人分ずつ次々と運ばれてきました。昼食は、周辺の飲食店の利用か、軽食の配布であろうと思っていたので驚きました。

午後は、会場の部屋を仕切りで3つに区切り、3つのセッションの口頭発表が並行しておこなわれました。ルーム1では、9月5日(火)と6日(水)の両日を通して、考古学系のセッション1の発表がおこなわれました。セッション1は、その内容によってさらに4つのセッション(「アジア周辺の旧石器時代と年代層序学 (Paleolithics and Chronostratigraphy of the Asia and the adjacent countries)」、「東ユーラシアの旧石器時代、クロノロジー、環境 (Paleolithics, chronology and environment in the East Eurasia)」、「東アジアの新人と考古学 (Modern human and bioarcheology in the East Asia)」、「更新世と完新世の地質学と考古学的技術 (Pleistocene and Holocene geology and

基調講演と口頭発表の会場



第3回 ASQUA 報告

archeological techniques)」に細分化されていました。ルーム2では、最初にセッション2「第四紀の火山活動 (Quaternary volcanic activities)」、次にセッション9「クロノロジー (chronology)」、最後にセッション6「気候モデル (Climate modelling)」の発表がおこなわれました。セッション2では、5件の発表の内4件が開催地となった濟州島についての研究でした。ルーム3では、最初はセッション3「海洋プロセス、海水準変動、沿岸災害 (Coastal and marine processes, sea level change, coastal disasters)」、次にセッション5「地盤災害と表層プロセス (Geohazards and surface processes)」の発表がおこなわれました。私は、ルーム3のセッション3の途中でルーム2に移動し、セッション9とセッション6の発表を聴きました。セッション3の発表は、日本と韓国での研究がほとんどでした。様々な手法で、特に過去数万年～数千年の古気候や海洋の変動を明らかにする研究が目立ちました。セッション6では、最終氷期最寒冷期以降の日射量や大気の変動に関するモデル研究の発表を聴きました。

口頭発表の後には、ポスター発表がおこなわれ、活発な議論があちらこちらで繰り広げられました。ポスターは、各セッションの発表件数に大きな差はなく、様々な分野に渡って発表がおこなわれている印象を持ちました。私も拙い英語でポスターの説明をし、人数は多くありませんが海外の特に若い研究者と交流を持つことができ、有意義なものとなりました。

2日目の9月6日(水)は、まず2件の基調講演から始まりました。蘭州大学のChen氏は中国内陸部で明らかにした完新世のモンスーンとダストストームの関係を話され、マサチューセッツ大学のWoodruff氏は、北米東海岸のラグーン等のイベント堆積物から明らかになった洪水リスク等を話されました。その後、1日目と同様に3つのセッションに分かれて口頭発表がおこなわれました。ルーム1では1日目に引き続き考古学系のセッション1の発表がおこなわれ、最後には考古学総

合討論がおこなわれました。ルーム2ではセッション7「東ユーラシアの古生態 (Paleo-Biomes in East Eurasia)」、ルーム3ではセッション8「古気候変動 (Paleo climate change)」の発表がおこなわれました。私はほぼずっとルーム2においてセッション7の発表を聴いていましたが、他の部屋(セッション)の発表にも興味を引かれるものがありました。発表時間が少しずつずれこんでいったため、狙った時間通りに他の部屋に移動できないことが多々あり、他の部屋の発表を聴くことを断念せざるを得ず少々残念な気持ちになりました。しかし、セッション7では中国、韓国、タイ、台湾といったアジア圏だけでなく、北アメリカやヨーロッパの古生態研究の発表が招待講演としておこなわれ、充実した時間でした。

2日目の発表は、部屋によって異なりましたが12時過ぎ～13時過ぎ頃終わりました。昼食はランチチケットが配布され、3つの韓国料理店から行きたい店のチケットを選ぶ方式でした。美味しい韓国料理を2日間に渡って食べることができ、満足度が高かったです。

9月7日(木)には巡検がおこなわれました。火山島である濟州島は、2007年に「濟州火山島と溶岩洞窟群 (Jeju volcanic island and lava tubes)」として韓国で初めて世界自然遺産に登録されています。島の面積の約10%が世界自然遺産にあたるそうです。巡検は、1日かけて世界自然遺産を中心に濟州島全体を巡るものでした。私は都合により巡検に参加できなかったため、9月6日(水)の午後の自由時間に訪れることを推奨されていた場所のひとつであった民族自然史博物館を見学しました。濟州島の自然と歴史がわかりやすく展示された博物館で、濟州島についての理解が深まりました。

次回のASQUAは、2021年に中国で開催されます。今回の濟州島でのASQUAは日本人の若手研究者の参加が非常に少なかったため、若手研究者の参加が増えることを願います。



ポスター発表の会場

◆自然史学会連合 体験講座出展の報告

小森次郎 (帝京平成大学)

11月4日(土)、福島県いわき市にある環境水族館「アクアマリンふくしま」において自然史学会連合(*)主催の公開講座が開かれました。このイベントはエントランスホールでの体験講座とマリンシアターでの講演会(テーマ「海の今昔を深〜く探る」)からなり、体験講座には日本第四紀学会のほか日本魚類学会、日本菌学会、日本サンゴ礁学会、日本藻類学会、日本DNA多型学会、日本動物学会、日本動物園水族館教育研究会がブースを出展しました。

本学会のブースでは昨年と同様のテーマ「身近な物から絵の具をつくろうー第四紀学の見かたで石や砂を考えるー」として第四紀学と学会の紹介を行いました。昨年は来場者が五月雨式に訪れブースが混乱したため、今回は30分ごとに5回に区切った開催としました。会場入り口には海外も含めた各地の岩石、火山灰、土質試料、及びそれらの粉碎途中の試料を並べ、来場者にはそのなかから石炭、花崗岩、鳴き砂、断層破碎帯の岩片(母岩は第三系堆積岩)、青金石(せいきんせき)をクイズ形式で抽出し、更にこの5試料から1つを選んで作業を進めてもらいました。5つの試料のうち青金石以外はすべていわき市産に限定したのはこのブースのこだわりでもあります。

去年まで半日だった開催時間が今年は10~17時に延びたこともあり、来場者数は子供25名、大人28名と一昨年と昨年を大きく上回りました(全20組の参加者のうち13組に実施できたアンケートを表に示す)。また、参加者による摩砕の時間が長すぎたという前回の反省から、今回は鉄乳鉢による粗砕き試料を参加者が磁器乳鉢を使って細かくする事としました。これにより小さな子供がいる親子でも摩砕→絵の具作成→試し書き、の一連の作業を無理なく体験できたようです。また絵の具の完成品が予想外の色であったことや油絵の



参加者が描いてくれた絵

ような立体感のある描きあがりには特に大人から好評を得ました(写真)。

現地では上記5つの試料と第四紀関連の学術分野とのつながりを配布資料で示しましたが、各30分の時間内でこれらを十分に解説することに苦労しました。アンケートの(5)で9割以上が「やや興味が沸いた」「興味が沸いた」と答えたものの、第四紀学や学会についてしっかりと理解をしてもらえたかについては不安があります。今後は学会誌や出版物を展示したり大会の発表タイトル一覧を渡すなど、更なる工夫が必要と感じました。また、誘客のためには岩絵の具で書いた絵をブースの背後に飾るなどのアレンジも大切なようです。以上、自然史学会連合の公開講座のなかで岩絵の具を使った学会紹介が2年続きましたが、来年度も講座の開催は予定されています。新たな企画・運営が学会員により提案されることが期待されます。

(*: 国内40の自然史関係の学協会が加盟する連合体。1995年に発足。http://ujsnh.org)

表 参加者アンケートの結果

	①	②	③	④	⑤
(1) このブースに参加した満足度 ①満足、②やや満足、③どちらでもない、④やや不満、⑤不満	12	1	0	0	0
(2) 絵の具を作った難易度 ①簡単、②やや簡単、③どちらでもない、④やや難しい、⑤難しい	4	3	2	4	0
(3) 一番好きな作業はなんですか? ①石の説明を聞く、②乳鉢ですり潰す、③岩絵の具で描く、④その他	5	5	4	0	-
(4) 今日の試料で一番好きなものは? ①石炭、②花崗岩、③鳴き砂、④断層破碎帯の石、⑤青金石	1	1	3	0	8
(5) 第四紀学会の活動に興味を沸かした? ①興味を沸かした、②やや興味を沸かした、③どちらでもない、④あまり興味は無い、⑤興味は無い	4	8	1	0	0

自由記入欄
のコメント

「良い経験になった」「5歳児が初めて筆で絵を描き良い体験になった」「身近な物が絵の材料で魅力がある」「知って楽しいと思った」「子供でも楽しく参加できた」「小学校の自由研究にしたい」「いわきに色々な石があるとわかってよかった」など

◆日本第四紀学会シンポジウム「ジオパークと学校教育」

平成 29 年 12 月 16 日（土） 0930～1700

お茶の水女子大学共通一号館 301

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

東京メトロ丸の内線茗荷谷駅、有楽町線護国寺駅から徒歩 8 分

<http://www.ocha.ac.jp/help/accessmap.html>

主催：日本第四紀学会

後援：日本ジオパークネットワーク（予定）、日本地学教育学会（予定）

コンピーナー：植木岳雪（千葉科学大学）、川村教一（秋田大学）、浅野眞希（筑波大学）

現在日本には 43 地域のジオパークがあり、日本各地にジオパークが広がってきている。ジオパークにおける活動は保全・教育・ツーリズムの 3 つに分けられ、学校教育に関する取り組みにもさまざまなものがある。そこで、ジオパークにおける学校教育のあり方や具体的な取り組みの方法を議論して、ジオパークの活動のいっそうの充実を図り、学会としてジオパークを支援する。あわせて、ジオパークにおける学校教育の取り組みに第四紀学的な内容を取り入れることを議論したり、ジオパーク関係者が第四紀学会に入って活躍してもらうことを期待したい。

プログラム

- 0930-0935 あいさつ
- 0935-1000 植木岳雪（千葉科学大学） ジオパークと第四紀学
- 1000-1025 藤岡達也（滋賀大学） ジオパークと理科教育・ESD
- 1025-1050 久田健一郎（筑波大学） ジオパークと地学教育
- 1050-1115 川村教一（秋田大学） ジオパークと大学教育
- 1115-1140 小原規宏（茨城大学） ジオパークとツーリズム
- 1140-1200 萩谷ひろみ（常陸太田市立水府小学校）
茨城県北ジオパークにおける小学校独自の取り組み
- 1200-1300 休憩
- 1300-1325 舟越洋二（十勝毎日新聞社） ジオパークと小学校教育
- 1325-1345 菊地光和（男鹿市ジオパーク学習センター）
男鹿大瀨ジオパークにおける学校教育の取り組み
- 1345-1405 星 康彦（那須烏山市立南那須中学校）・小峯洋一（那須烏山市役所）
那須烏山ジオパーク候補地における学校教育の取り組み
- 1405-1425 山口珠美（箱根ジオパーク推進協議会）
箱根ジオパークにおける学校教育の取り組み
- 1425-1445 鈴木雄介（伊豆半島ジオパーク推進協議会）
伊豆半島ジオパークにおける学校教育の取り組み
- 1445-1510 休憩
- 1510-1530 富川友秀（静岡県立松崎高校）
伊豆半島ジオパークにおける高校独自の取り組み
- 1530-1550 中村有吾（室戸ジオパーク推進協議会）
室戸ジオパークにおける学校教育の取り組み
- 1550-1610 鈴木孝志（青梅市役所） 社会教育からみたジオパーク
- 1610-1700 コンピーナー 総合討論
- 1700- 懇親会

◆日本第四紀学会主催シンポジウム

「改めて問う“縄文海進”とは何か？－第四紀学的視点からの再検討－」のお知らせ

下記の内容で、日本第四紀学会主催のシンポジウムが行われます。参加費は無料で、事前登録の必要はありません。ふるってご参加下さい。また、当日午前中、同じ会場にて評議員会が開催されます。詳細は第四紀学会ホームページなどでお伝えします。

シンポジウム「改めて問う“縄文海進”とは何か？－第四紀学的視点からの再検討－」

[日 時] 2018年2月17日(土) 13時～18時

[場 所] 明治大学・駿河台キャンパス・アカデミーコモン9階309B教室 (JRお茶の水駅から徒歩3分) http://www.meiji.ac.jp/koho/campus_guide/suruga/access.html

[趣 旨] “縄文海進”は、日本人には広く知られている言葉です。これは、縄文時代の貝塚の分布とその地形から知られる、現在の海岸線より内陸まで海が広がった現象に対して名付けられたものです。この現象が生じた原因はいったいどのようなものなのでしょうか？縄文時代には地球規模の温暖化が生じて極地の氷河が融解したために海面が上昇し、その後、再び寒冷化して極地の氷河が拡大して海面が下がったことで海進や海退が生じたと考える人が多くいます。しかし、地球規模の視点で考えると、必ずしもそうではないことがわかってきました。日本列島における“縄文海進”の海面変化やその正確な時代、この時期の温暖化の実態や原因、これらが自然環境やヒトの文化に与えた影響についても、まだまだ、たくさんの謎が残されているようです。このシンポジウムでは、地形や遺跡などで身近に知られてきた“縄文海進”をテーマに、考古学、地形学、地質学、氷河学、地球物理学、古生物学、古海洋学などの第四紀学の様々な分野の最新の知識を集めて、私たちが知っている、これまでの“縄文海進”のイメージや常識について、皆さんと一緒に考え直して、これからの課題を探ってみたいと思います。

[プログラム]

13:00-13:05 開会の挨拶 (齋藤文紀：日本第四紀学会会長・島根大学・産業技術総合研究所)

13:05-13:15 趣旨説明 (三浦英樹：国立極地研究所)

13:15-13:45 “縄文海進”の研究史と用語・編年に関する諸問題 (辻 誠一郎：東京大学)

13:45-14:15 “縄文海進”の海域環境と人間活動 (一木絵理：上高津貝塚ふるさと歴史の広場)

14:15-14:45 “縄文海進”とその前後の北半球氷床・南極氷床の変動史と海水量
(三浦英樹：国立極地研究所)

14:45-15:15 縄文時代以降の海面変化を引き起こす様々な要因－ハイドロアイソスタシーの役割－
(奥野淳一：国立極地研究所)

15:15-15:20 休憩

15:20-15:50 晩氷期以降における落葉広葉樹林から常緑広葉樹林／スギ林への移行時期の地域的な相違 (高原 光：京都府立大)

15:50-16:20 二枚貝の微細成長縞を用いた“縄文海進”期の高精度気候復元
(宮地 鼓：国立アイヌ民族博物館設立準備室)

16:20-16:50 “縄文海進”期における黒潮の水温と流路 (池原 実：高知大)

16:50-17:20 旧海面高度の復元と地震性地殻変動解読への応用、問題点
(藤原 治：産業技術総合研究所)

17:20-17:55 総合討論 (司会：松浦秀治：日本第四紀学会副会長・国立科学博物館)

17:55-18:00 閉会の挨拶 (鈴木毅彦：日本第四紀学会副会長・首都大学東京)

[主 催]

日本第四紀学会

[共 催]

産業技術総合研究所 地質調査総合センター (予定)、情報・システム研究機構 国立極地研究所 (予定)

[後 援]

文部科学省 科学研究費助成事業 新学術領域研究「熱－水－物質の巨大リザーバ：全球環境変動を駆動する南大洋・南極氷床」(予定)

[世話人]

三浦英樹 (国立極地研究所)、奥野淳一 (国立極地研究所)、藤原 治 (産業技術総合研究所)、

松浦秀治（国立科学博物館）

[問い合わせ先] 日本第四紀学会事務局 E-mail : daiyonki(at)shunkosha.com
((at)の部分をアットマーク @ に変えて下さい)

[参考になる文献・情報]

前田保夫（1970）『縄文の海と森』蒼樹書房。

杉村 新（1973）『大地の動きを探る』岩波書店。

齋藤文紀（1989）海進・海退、海水準変動と堆積相。堆積学研究会報、31号、49-54。

松島義章（2006）『貝が語る縄文海進—南関東、+2℃の世界』有隣新書。

横山祐典（2007）地球温暖化と海面上昇—氷床変動・海水準変動・地殻変動。日本第四紀学会・

町田 洋・岩田修二・小野 昭編『地球史が語る近未来の環境』、33-54、東京大学出版会。

齋藤文紀（2008）研究史から見た関東平野の沖積層。日本地質学会編『日本地方地質誌3 関東地方』、369-380、朝倉書店。

中田正夫・奥野淳一（2011）グレイシオハイドロアイススタシー。地形、32巻、327-333。

工藤雄一郎（2012）『旧石器・縄文時代の環境文化史：高精度放射性炭素年代測定と考古学』新泉社。

遠藤邦彦（2017）『改訂版 日本の沖積層—未来と過去を結ぶ最新の地層—』富山堂インターナショナル。

日本第四紀学会 HP：だいよんき Q&A 「縄文海進の原因について。日本史教科書には温暖化で氷河が溶けたためとあるのですが、氷河は主因ですか。」

<http://quaternary.jp/QA/answer/ans010.html>

◆日本第四紀学会 2017 年度第 2 回執行部会議事録

日時：2017 年 8 月 26 日（土）12:15 ~ 12:50

会場：福岡大学 18 号館 1821 教室

出席：齋藤（会長）、鈴木（副会長）、池原（領域 1）、須貝（領域 2）、高原（領域 4）、吾妻（庶務）、三浦（会計）、北村（編集）、百原（広報）、藤原（行事）

欠席：松浦（副会長）、兵頭（領域 3）、植木（領域 5）、小荒井（渉外）

議事：

1) 評議員会・総会資料を確認し、誤字についてそ

れぞれの会合で資料の修正箇所を説明することとした。

2) 評議員会・総会の役割分担を確認した。

3) 委員就任の依頼状況を確認した。

4) 編集委員会から『第四紀研究』の刊行準備状況と論文の投稿状況について報告された。

5) 『第四紀通信』Vol.24, No.5 の記事担当を確認した。

6) 次回の執行部会会合を 10 月 9 日（月）に開催することとした。

◆日本第四紀学会 2017 年度第 3 回執行部会議事録

日時：2017 年 10 月 9 日（月・祝日）

9:30 ~ 12:30

会場：首都大学東京 秋葉原サテライトキャンパス 会議室 C

出席：齋藤（会長）、鈴木（副会長）、松浦（副会長）、須貝（領域 2）、兵頭（領域 3）、高原（領域 4）、吾妻（庶務）、三浦（会計）、北村（編集）、百原（広報）、藤原（行事）、小荒井（渉外）、永峯（事務局）

欠席：池原（領域 1）、植木（領域 5）

議事：

1) 各領域および委員会の活動について報告があった。

2) 会長から推薦があった法務委員会の委員候補者を確認した。

3) 今年度の名誉会員および功労賞の選考について、選考委員会の委員候補者を次回の執行部会までに選出することとした。

4) 編集委員会に副委員長をおくことについて検討し、編集委員会で「編集委員会規程」の一部改訂案を作成することとした。

5) 2017 年大会における若手・学生発表賞の選考結果を確認するとともに、同賞の選考運営について検討した。

6) 会員 ML、評議員会 ML の投稿権について確認した。

7) 外部から提供された情報に関する学会 HP への掲載および会員 ML への配信について検討し、対応方針のめやすの原案を広報委員会で作成することとした。

8) 『第四紀通信』第 24 巻 6 号の構成および執筆担当者を確認した。

9) 「評議員会・総会における欠席者の委員等に関する内規」について検討し、庶務委員会で必要性の有無の確認と対処方針を検討することとした。

10) 2017 年度第 2 回評議員会の日程について検討した。

11) 2017 年度第 4 回執行部会を 2017 年 12 月 23 日に開催することとした。

以上

◆アーサー・ブルーム博士を偲んで

アメリカのコネル大学名誉教授、地形学者、第四紀研究者として世界に知られるアーサー・ブルーム博士が去る5月31日に、ご家族に囲まれて逝去された。享年88歳。博士は度々来日され、日本の地形に詳しく、日本人の知己も多い。ここに博士の業績の一部を紹介し、多くの知己とともに御冥福をお祈りする。

博士は、初期にアメリカ東部の沖積低地の研究をされていた。その際試料採取に使われたピートコアラーはその後世界の各地の完新世層の採取に用いられ、最終的には1880年代に私の手で預かることになり、銚子半島、佐渡島、奥尻島、御前崎、伊豆半島そのほか各地での完新世層の掘削に使われた。私から借用された方も多く、彼らはブルーム博士からの借用ということから、ブルームサンプラーと呼んでいた。

博士は、1970年代以降は、主な調査地域を南太平洋に移し、トンガ、バヌアツなどのサンゴ礁段丘を主対象として、第四紀後期における段丘形成と海水準変化や地殻変動とのかかわりに多くの業績をあげられた。とくにパプアニューギニアのヒュオン半島における業績は、チャペルによる先駆的な業績とともに、海水準変化の基本として海成段丘の研究の中では必ず引用される重要な文献となっている。彼はまた国際的研究のリーダーとして、世界の諸地域の調査にあたった。たとえばIGCP-60のリーダーとして、南カロライナ、カナダ、黒海、アルゼンティン、オーストラリア、中国などの調査などにあたった。多忙の中で沢山の論文を執筆されたほかに、名著 *Geomorphology – a systematic analysis of late Cenozoic landforms* を出版された。

以下に個人的なことになるが博士との出会い、それをとおしての日本の地形学(者)とのかかわりを述べたい。初めての彼との出会いは1973年ニュージーランドでのINQUAの大会で、その際、彼の修士論文と当時の私の調査地域が相接してい



ご家族からいただいた近景

ることがわかり（ニュージーランド北島、ワイラパ地域）話が弾み、それ以来の知己となった。1987年には、翌年に予定されているパプアニューギニア、ヒュオン半島のサンゴ礁段丘の国際共同研究への誘いをうけ、私は即座にぜひ参加したいと答えた。日本では、学問の世界でもまだ性差別を感じるがあったから、この誘いは本当に嬉しかった。1988年夏のマラリア蚊の多い水も電気もない困難な場所での野外調査は、ヒュオン半島での新しい発見、数か国からの専門を異にするすばらし科学者たちとの交流に加えて、ブルーム博士やチャペル博士の卓抜した観察力、温かい人柄にふれて、それ以降の親交を深める契機となり、私にとっての忘れられない経験であった。野外調査では、ブルーム博士が毎朝真っ先に起きてメンバーのための熱いコーヒーを用意し、率先してかたいサンゴ礁にトイレ用の穴を掘っていた姿を忘れられない。

彼は科研費や学振などの経費によって国際ワークショップや国際会議（たとえば東京、1980、1993、神戸、1980、1993、喜界島、1990、横浜1993）、とそれと関連した巡検などに参加し、日本の地形学者と親交を深めるとともに、日本の地形学についても知見を深めた。忘れられないこと



喜界島の人たちへの講演（1990年）



定年退職の日に海外の招待者（チャペル、太田）とご自宅で（1996年）

の一つは、国際会議で座長を務めた際、アメリカの若い研究者がしばしば猛烈な早口の英語をしゃべるのをきいて、ここは国際会議であるから明晰な英語を話すようにたしなめたことである。彼の訪ねた地域は、波照間島、喜界島、四国、佐渡島、関東、関西の各地などで多岐にわたる。「日本の地形学に関する私の印象」UP337号、12-15(2000)は、日本の地形や地形学についての示唆に富むエッセイである。

博士は1996年にコーネル大学を定年退職された。その記念会に海外からはチャペル博士と私の2名が招待された。アートの自宅に数日滞在し、3人で今までの研究について語り明かした。これが最後の会話になるとは思ってもいなかった。ユーモアに富んだ語り口を聞くこともできない。寂しい限りである。改めて博士との長い交流を思い返し、博士のご冥福を御祈りする。

太田陽子

◆ 2017年度第2回評議員会開催案内

下記の日程で、2017年度第2回評議員会が開催されます。評議員および会長経験者の方には後日、通知が送付されますので、出欠の回答をお送り頂きますようお願い致します。なお当日の午後には同じ会場で、シンポジウム「改めて問う“縄文海進”とは何か？—第四紀学的視点からの再検討—」を開催致しますので、併せてご参加頂ければ幸いです。

日時：2018年2月17日(土) 10:00～12:00

場所：明治大学駿河台キャンパス アカデミーコモン9階 309B 教室

議事(予定)：

- (1) 2017年度上半期における活動報告および会計中間報告
- (2) 法務委員会の委員選出について
- (3) 名誉会員選考委員会の委員選出について
- (4) その他

★★★ 第四紀通信に情報をお寄せ下さい ★★★

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。

広報委員長：百原 新 (arata(at)faculty.chiba-u.jp) 宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月1日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が出来た段階でホームページに掲載するよう努力しています。

奇数月15日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 千葉大学大学院 園芸学研究科 百原 新
〒271-8510 千葉県松戸市松戸 648 FAX: 047-308-8720

広報書記：那須浩郎・糸田千鶴・奥村公弥子・岩本容子

日本第四紀学会ホームページ <http://quaternary.jp/> から第四紀通信バックナンバーのPDF ファイルを閲覧できます。

日本第四紀学会事務局

〒169-0072 東京都新宿区大久保2丁目4番地12号 新宿ラムダックスビル10階
株式会社春恒社 学会事業部内

E-mail: daiyonki(at)shunkosha.com 電話: 03-5291-6231 FAX: 03-5291-2176